

MADNO レポート-10

2007年7月28日

“号外”でお知らせした、60年ぶりの水害は依然現在進行形です。それでも主要道路、鉄道は概ね回復したようです。問題は市街地における電気・水道の供給で、ミネラル・ウォーターの販売は、石油ショック時のトイレットペーパーのように一人当たりの販売量を制限しています。前報でご紹介したジェフは、自身被害は無かったものの、親族・知人には被害があったようです。

順番が前後する結果になりましたが、このジェフを訪ねた〈四半世紀ぶりの再会〉をお届けします。

〈四半世紀ぶりの再会〉

17日(火)朝自宅を出る時、このところ続いている曇天・驟雨が気になりましたが、幸い駅まで降られずに済みました。グラスゴーを発し本島南西の港湾都市、プリマスへ向かう列車は定刻通り10時9分ランカスター駅を発車しました。列車はこの路線馴染みのヴァージントレイン。座席は予約してあったので座れましたが、予想したより混んでいます。夏休みが始まったからでしょう。曇り空の中に時々現れる僅かな晴れ間、何処までも続く緑の牧草地。6月初旬のロンドン行きと何も変わりません。変わっているのは、今回は観光が主目的ではなく、友との四半世紀ぶりの再会です。久しぶりの長距離列車の旅はこうして始まりました。

英国へ来た目的は無論“OR 歴史研究”ですが、ジェフとの再会はそれに次ぐ重要な意味を持っています。24年前彼が口にした言葉が、私の英国感を一変させたからです。ぼんやり車窓を眺めながら、「(彼はあの言葉を覚えているだろうか?)」、「(それを問うのをどんな状況下で行おうか?)」、「(出来れば彼の息子が一緒に時に話題にしたいな)」、「(あれには特別な意味があったんだらうか?)」。それに例の“クラシックカー”はどんな車なんだらう? 晴れ間の広がってきた緑野を疾走する列車の中で、思いは24年前に遡ります。

1) バークレー

1983年春もまだ浅いある日、直属上司の部長から「人事から、今年の短期MBA留学の対象者に君を選びたいと言ってきた。OKしておいたから仕事はそのことを考えながら進めてくれ」と突然申し渡された。

この教育制度は私が川崎工場在任時代スタートし、毎年数名の中堅課長職を米国マネージメントスクールに派遣するもので、比較的若い人を対象としたフルタイム(1年以上)のコースとは別に、主として中堅経営幹部を対象としたものである。東燃が当時派遣していた大学は、スタンフォード、コーネル、ピッツバーグなどで、前年からこれにバークレー(カリフォルニア州立大学バークレー校)が加わっていた。川崎工場からも既にこのプログラムに何人かの先輩が派遣されており、いずれ自分にもこんなチャンスが与えられると

良いなー、と漠然とは思っていましたが、それが正夢になったわけです。

人事が具体的に動き出したのは4月に入ってから、「スタンフォードに願書を出すことにしました」とアプリケーション・フォームを持ってきた時には内心「(ヤッタ!)」と思いました。なんと言っても評価の高い大学だし、出張の帰路一度立寄る機会がありキャンパスの素晴らしさが印象的でした。加えて同期入社の方F君が、このプログラムスタート前、会社派遣初のフルタイムMBAコースを修了しており、何かと相談に乗ってもらえるからです。

ところが5月になって、人事から「スタンフォードはダメになりました。理由は、日本人枠は既に満杯とのことですよ」と言ってきたのです(これが来た時、F君に願書内容を見せたところ、「本当の理由は多分“報酬欄”だろう。この額では幹部社員として安すぎる」と言われました。人事も私もここは正直ベースで良いだろうと思っていました)。これは東燃がスタンフォードに派遣し始めて初のことでした。人事も予期していなかったようで、改善の策に苦慮していましたが、代わりにもって来たのがバークレーでした。

9月中旬指定された大学近くのホテルにチェックイン。ここが全学生のこれから2ヶ月弱の生活場所になります。クラスが始まる前日は夕方から学内で歓迎の宴が開かれます。それに先立ち、事務的な連絡や学生とクラス担当教職員との紹介の場が設けられていました。

初めて全員が集まる場に参加して意外だったのは、参加者がたった20人しかいなかったことです(実は後で知ることですが、このことでプログラムは存亡の危機にあった)。他大学では複数クラスもあるし、バークレーも昨年の参加者は50人近く在ったと聞いていたからです。内訳は、アメリカ;13、サウジ;2、イスラエル、デンマーク、オーストラリア、英国、日本各1です。この少人数で日本人1人の環境が、私のそれからの国際感覚を一変させ、どれほどプラスになったか計り知れないものがあります。

さて、予定された導入プログラムが終わり、大学幹部が参加するパーティーまでの間、部屋にビールなどが用意され歓談する時間が設けられました。最初に声をかけてくれたのはシェブロン・エルセグンド製油所の技術部長、次いでIBMから参加のセールス、マーケティング部門の二人の幹部など、デンマーク人はBPの販売部長でこれも石油。仕事に近いところは直ぐに打ち解けて行きます。

やがて、英国人に話す場がやってきました。こちらから「You are from England, aren't you?」と問いかけると、睨みつけるような目でこちらを見てしばし無言。一呼吸置いて冷たく「I'm from UK!」「(エッ??) …」、周りに居たアメリカ人も一瞬怪訝な表情です。「I am from the United Kingdom, not England!」アメリカ人がニヤッとしました。こちらも取り敢えず調子を合わせて作り笑い。しかし、内心;“連合王国”と表するのは知っているが普通は使わないよな!「つきあい難そうだな」これがジェフとの初対面でした。

しかし、イギリス=イングランドではなく、連合王国。それまでラグビーの5カ国対抗(イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、フランス)やフットボールの予選などで“イギリス”が無いことに違和感をもち、何故イギリスだけ三つも出てく

るんだ？何故皇太子が“プリンス・オブ・ウェールズ”と呼ばれるんだ？と疑問に思っていたことに一歩踏み込むきっかけを与えてくれたことも確かです。

パークレーでのジェフとの付き合いが変わってくるのは、期の半ばで一週間の休みが入った時です。アメリカ人は郷里に帰ったり、家族を呼び寄せたり、自分たちの時間を過ごすようになります。取り残された外人の中で、もともと授業も含めてほとんどわれわれと馴染まないサウジの二人は何処とも知れず消えてしまい、オーストラリア人もディズニーランド方面に出かけ、残るはデンマーク、イスラエル、英国、日本の4人になりました。そこで4人で（実際はイスラエルを除く3人が飲んでいる席で決まり、後からイスラエルが加わった）ヨセミテヘレンタカーでドライブすることになりました。リーダー格はデンマーク、なんでも積極的でイニシアチブをとりたがる、仲間から“ヴァイキング”と仇名をつけられた男です。最初は彼がハンドルを握り私がナビゲータ、左ハンドルの国から来ているから慣れていると思ったが結構性格が出て荒っぽい。思わず大声を上げてしまう。ナビゲータへの要求もきつい。次いで運転をジェフが代わる。今度もナビゲータ。慎重な運転で恐怖感が無い。次は私が運転し、ヴァイキングがナビゲータ。やたら命令調で疲れること夥しい。ナビゲータがジェフに代わる、右ハンドル同士交差点では“左を見て！”と的確な助言をしてくれる。ホテルに帰り着き、夕食も終わりヴァイキングが消えた時、「Hiro（クラスの仲間からこう呼ばれていた）が大声あげた時、俺も怖かったよ。あいつの運転は酷いな！」とぼやいた。それ以降、彼はぶっきらぼうなもの言いが、心優しい子煩悩な男であることが次第に分ってきたのです。

それにしてもあの“UK！”に特別な意味があったのだろうか？それを確かめずに別れたことが長く心残りでした。

2) 再会への序走

毎年版画の年賀状を送ると、手紙とブリストルの絵葉書の入ったお礼状が来るようになりました。子供が似たような年齢だったこともあり、内容は家族のことが中心で彼の優しさがいつも伝わってきました。

彼がパークレーに来た時、仕事はBPの子会社、Bristol Composite Materials (BCM) 社の技術担当常務で、主にカーボンファイバーで構造材を作るビジネスを進めていました。専門は化学、BP本体で製品開発担当のエンジニアをした後、その職に転じたのです。プログラムに参加する時、会社紹介のパンフレットを持参し皆に配るよう大学から求められていました。彼の資料には管、角材、板に加工されたカーボンファイバーを使った構造物・骨材のような物がのっていました。

当時東燃は新事業の一環としてカーボンファイバー実用化の道を模索していました。パークレーを去って5、6年した頃、このカーボンファイバー事業推進の責任者と雑談している時たまたまBCM社の話になり、海外調査の一環に加えさせて欲しいと求められました。当時は今のようにメールが無かったので、ファックスでやり取りしましたが、快く訪問を受けてくれ、直接ビジネスには繋がらなかったものの、調査の成果は上がったと出張者か

ら感謝されました。

さらに、90年代初旬姪の一人が大学卒業後語学研修留学で1年間ロンドン近郊に滞在することになりました。それを彼に知らせたところ、“是非訪ねてくれ！Welcomeだ”と知らせてきました。年恰好の似た彼の娘と姪の交流が作り出す新たな関係を勝手に期待し、訪ねる本人より私の方が興奮してしまいました。直接の知り合いでもない外国人に、研修中に会うのは姪にとって迷惑な話だったかもしれませんが、私の強い要望を聞き入れてくれ、渡英後しばらくしてブリストルを訪ねてくれました。大歓迎されたことは言うまでもありません。

帰国した姪は二つのお土産を持って来てくれました。一つは彼の家族が私のために用意してくれた、昔のブリストル港の風景を描いた2点の石版画です。明るいトーンの港や船が細い線で絶妙に描かれた素敵な作品です。素人版画をたしなむ私のことを考えて選んでくれたに違いありません。この石版画は書斎の机の前、顔を上げれば目の前に見える位置に今も置かれています。もう一つは、彼の家に“クラシックカー”があったという情報です。手紙のやり取りでは一度も話題に出てきていません。どんな車だろう？英国人のクラシックカー好きはその世界でも有名です。何とかこれを見に（出来れば乗せてもらいに）彼を訪ねたい。

4年前の年賀状の返礼に、ビジネスの世界からの引退に備え、住居を移ったことが書かれていました。ブリストル市内から近郊の村（Village）に移り、夫婦で自然を楽しむ環境を整えつつあること、是非ここを訪れて欲しいともありました。

昨年年初の手紙には、ついに引退したこと、ブリストル裁判所の裁判員をボランティアで始めたこと、男性コーラスの合唱団に加わったこと。この合唱団が近く富士通の合唱団と交流することが書かれていました。早速富士通の知人に問い合わせてみましたが「そのような計画は無い」との返事。どうやら富士通が買収したICL（英国最大のコンピュータメーカー；現在は富士通のヨーロッパにおける情報サービス事業の拠点）の合唱団ではないかと推察しています。また夫人（Avril）とウェールズの山歩きをしているところや、新居の庭の写真などが同封されており、いよいよ新生活が始まったことをうかがわせる情報で溢れていました。

昨年9月東工大大学院研究生になり、Lancaster大から客員研究員受け入れ許可が出た時直ぐにメールで知らせました。OR歴史研究のために英国に出かけたい、と言う話は具体的な計画が出来る前から毎年賀状に添えた手紙に書いてきました。でも「今度は本当に実現するんだ」。“毎年来たい来たいと言ってくるが、本当に来るのかな？”と言う疑念が彼にはあったでしょう。「やっと実現することになったか！長かったな！Avrilと待っているぞ！」儀礼的な響きはありませんでした。

今年の正月受け取った手紙は衝撃的な内容でした。昨11月中旬Avrilが急逝したと言う悲しい知らせです。心臓だったそうです。「でも嬉しいことに、Avrilの死の数日後、神は新しい命を授けてくださった。次女のところに女の子が誕生した。名前はAvrilとしたよ」

と。直ぐにお悔やみのメールを送ったのは言うまでもありません。しかし、彼を訪ねる喜びは失せてしまいました。会ったらなんと言えればいいんだ？男やもめの所へ行っても迷惑に違いない。

そんな私の心を見透かしたように、4月初め彼からメールが来ました（年賀状で4月から渡英すると書いていたので）。「いつこちらに来るんだ？スケジュールを教えてくれ。着いたら連絡をくれ。訪ねてきてくれ」。携帯電話の番号も書いてあります。

5月、ランカスターのホテルから電話をしました。「Avril のこと、残念だ。一緒の時に訪ねたかった。そちらに行くまでに生活基盤を作ること、研究の進め方を整理することで些か時間がかかるだろう。6月下旬から7月上旬には出かけるようにしたいが、そちらの都合はどうだい？」「No Problem だ！正確な計画を決める前にもう一度連絡してくれ。手助けが必要なことは遠慮なく言ってくれ」

7月16日の週にブリストルに行きたいがどうか？と問い合わせたのは6月下旬。16日は裁判所の仕事があるので17日から来ないか？うちに泊まってもいいし、ホテルでもいい。希望を言ってくれたらこちらで準備する。せっかくコッツウォルズを廻るなら一泊したほうがいい。17日は家で息子の料理で夕食をしよう。18日日中はブリストル・バース観光、ディナーは外にしよう。料理は何がいいかな？ホテルからレンタカーの手配まで出発前日の16日まで（この日は娘さんに頼んで）細かい調整をしてくれました。

列車は英国の典型的な天候；曇りが定番、驟雨と晴れがそれに混じる、のなかをダイヤ通り走っています。再会はどんな風になるだろう？Avril の死を悼む言葉はどう言えればいいだろう？バーミンガムを過ぎてからはこんなことばかりが頭の中を駆け巡っています。

3) Village (村) へ

駅での再会は、まるで昨日別れた同級生に会う感じでした。ブリストルの中央駅、テンプル・ミード駅は番線が20位ある割には駅舎が小ぶりで、改札を出ると切符売り場とさして広くないホールがあるだけでした。定刻に着いたが彼は来ていない。外かな？とホールを出かけたところに、髪が白くなり体もひと回り小さくなった感じですが、24年前の一見取っ付き難い彼がいました。「今丁度着いたところだった」「こちらもそうさ」握手をすると直ぐ私の荷物を取り上げ、「列車の旅はどうだった？」「途中雨が酷い所もあったが、ここへ近づくとつれ回復してきたので気分もファインだ」「この車だ。そちらへ廻ってくれ」見るとマツダ・アテンザである。助手席に座るとミッションはオート。ちょっと拍子抜けしてしまいました。多分クラシックカーで楽しんで、街乗りはイージーな車にしているに違いない、と勝手に納得。

駅近辺の教会やモニュメントを紹介してくれながら中心街へと進んでいきます。「ここは息子が学んだブリストル大学だ」巨大なタワー形式のホールが街なかに聳え立つ。ちょうど卒業式が終わったところでガウンを纏った若者が歩道に溢れています。「最初にホテルにブッキングインしてから家に行こう」「(“チェックイン” じゃないんだ) 了解」

ホテルは商業地区が住宅地区に変わるクリフトンと言う地域にあります。四階建てで横

幅が広い（実は中央部半分くらいがホテルだった）、クラシカルな造りです。半円形の車寄せがあり、車寄せの外側から歩道側の塀までの間は植え込みがあり、入り口は歩道からは見えません。入り口はドア一つ分、中の受付は二人（その内のベテラン格は北京出身の若い女性だった）。ロビーも 5, 6 人分しかありません。部屋は 4 階ですがエレベータはありません。おまけに四階は後から継ぎ足したらしく、急な階段を上がらなければなりません。しかし、適度な古さと家庭的な雰囲気の中の良いホテルです。部屋も清潔で申し分ありません。窓の下には個人住居（タウンハウス）のバックヤードも見えます。

荷物を置き、日本から持参した土産だけ持って彼の車に戻りました。「どうだいこのホテルは?」「こじんまりして、清潔で、静かな環境。気に入ったよ。予約ありがとう」「ここへは Avril と一度ディナーを食べに来たんだ。その時良いホテルだと思ったのでここにしたんだ」「(Avril が出てきた! 何と云えばいいんだ?)」

車はやがて左側に広大な芝生が広がる地域に出てきました。「ここはダウنز (Downs) と呼ばれる所でブリストル市の土地なんだ。一切建物は建てない。市民の憩いの場所なんだ」「ダウنزの外れに家が見えるだろう。以前はあそこに住んでいたんだ。Hiro の姪が訪ねてくれたのはあそこだよ」。右側も適度に木々が茂り、大きく古そうな家々がある。「こちら側はヴィクトリア時代の個人住宅だ。いまはフラットやオフィスとして使われている」。車は更に北へ向かって街を離れていく。しばらく木立の中の道を進んでいくと、やがてちよつとした集落に入り、中心部には忠魂碑のようなものが建ったランナバウトが現れ、商店などがその周辺にあるところへでました。「ここが Westbury on the Trym (トリム川沿いのウェエストバリー)、わが村さ!」「右側に見えるのがパブだ」[White Horse] とあります。少し進んで「ここが俺のパブ」今度は [White Lion] です。このパブの前の路地のような道に車が左折して入ると、そこは小さな広場になっておりその一角に彼は車を停めました。「Vine Cottage へようこそ! ここが我が家だ」

4) Vine Cottage

正直拍子抜けしました。田園の中の一戸建て、前庭も広く隣家との間も木立で遮られ、石造りの重々しい家、何台か車が入るガレージ、そこには例の“クラシックカー”が、勝手に想像していた彼の家とは全くイメージが合いません。

先ず場所です。村を抜ける道両側は商店や例の長屋風個人住宅などがあります。重々しい石造りではなくモルタルのようなもので仕上げられています（昔は石積みが露出していたが、近年はこの上からモルタルを塗るようになってきたとのこと）。路地の両側は 2 階建ての家で、道路沿いの家と逆 Γ の形で彼の家（上の横棒部分；下の空間が小広場）が一体になっています。広場の片隅に車庫が一棟その横に三台の駐車スペースがあり、ここに彼は車を停めました。広場に面した家の半分くらいはピンクに塗られ、車庫も同じ色です。彼の家は白、ピンクと白の間はグレーですが玄関とは別にグリーンに塗られた車庫か倉庫の両開きのドアがアーチ状を成して壁面ぴったりはめ込まれています。どうやらピンク・グレー・白と三世帯がこの広場を共有しているようです。田園風景とは全く関係ない、古

い宿場の商工業区画、そんなイメージを想像してください（実はその通りなのですが）。

“Vine Cottage”と書いた楕円形の銘板が玄関入口左側に貼り付けてあります。他の家も“XX Cottage”とあります。これが正式な住所なのです。玄関の左右には縦長の窓、窓の下は小さな花壇になっていて花々がきれいに咲いています。玄関入口の左右、花壇との間には飾り物や鉢を置く石の台があり、右側の台には半球状の石の表面に“赤い竜”が彫られた置物。「これが我が家のシンボルさ」「???」。玄関の扉は薄茶色の木製で、かなり年季が入っています。取り出した鍵も大きなものでした。さあ、初めての英国人住宅訪問です。

玄関の先にもう一つドアあるタウンハウス風では無く、いきなり玄関ホールです。左側は二階へ上がる階段、右は通路でその先は二手に分かれます。右手が **Sitting Room**（居間+客間）、この **Sitting Room** は広場に面する部分と裏庭（本庭）に面する二つに分かれますが一部屋としても使えます。両方ともソファ、テーブル、暖炉などがあり、最初は広場側の部屋に案内されました。大きな液晶テレビが一角を占めています。「ここで寛いでいてくれ。紅茶？ コーヒー？」「もちろん紅茶を」。彼は玄関から入って左側のキッチンに消えました。部屋全体にクリーム色ですが薄暗い感じです。意外と天井が低く、照明は四隅にキャンドル風の小さなものだけ。今は点灯されていません。ソファに座り広場の側を見ると、低い位置まで開口部のある窓の外の花壇の草花が、室内の暗さと微かなコントラストをなし映えます。部屋の壁には家族の写真と趣味の良い絵が何枚か掛けられています。立ち上がってそれらを眺めていると、スケッチに水彩を施したすっきりした感じの風景画が何枚かあります。嘗て贈られた石版画と雰囲気似ています。あとで分かったことですが、水彩画は全て **Avril** の作品だったのです。多分あの石版画も彼女が選んでくれた物でしょう。

ジェフがキッチンから戻り「ちょっと庭を見るか？」と。庭側の居間にはフランス窓がありそこから庭に出ます。庭の位置は居間より高く、石段を 2 段ほど上がります。さすがに広い！中央は芝生ですが周辺部には花々、芝生の中に未だ植えて間もないリンゴの木とスモモのような木があります。両方ともホンの 1m 位の高さですがいくつか青い実をつけています。庭の奥には池があり、コイと金魚が泳いでいます。庭の奥両隅には小さな小屋があり、庭いじりの道具が納められているのでしょう。隣家との境界は石積みの塀になっています。いわゆるイングリッシュガーデンで、けばけばしさや堅苦しさが無く好ましく感じられました。

部屋に戻り、ジェフの淹れてくれた紅茶とケーキを味わいながら、あらためてフランス窓を通して見た庭は、先に行くほど緩やかに高さを増していくので、濃い芝生の緑と花々の色、周辺の草葉の緑がクリーム色の壁をキャンバスにバランスよく配された一遍の風景画になっています。ふと天井を見ると中央に四つの受け皿を十字の先に持ったランプがありました。どうなっているのか見ようと立ち上がる私に、「それはオイルを入れて灯すんだよ」「この家は 200 年以上経っているのでその雰囲気を残したかったんだ」「200 年！（私の家に関する価値基準を一喝された瞬間です）」

「さあ、家の中を案内しよう」 玄関から入って突き当たりを左に行くとダイニングキッチンがあります。ここは全く古さを感じさせない近代的なつくりです。いすは 6 人分、庭に面する側も反対側も調理台でその下は収納部、玄関側の壁には大型のレンジなどが据え付けられています。ここを抜けるとまた部屋があります。「ウーン、何て言ったらいいかな？我われは“ユーティリティ”と言っているんだけどね」 広場から庭に至る細長い部屋でその間を貫通する通路と並行して外側に作業台・流し・大型冷蔵庫・ボイラーそしてトイレまであります。庭側の先はΓ形になり、ここから庭に出入りするようになっています。汚れ仕事は、生活空間を通らずこの部屋経由で出来るようになっているのです。流しがあるので「ここで台所仕事も出来るのか？」と問うと、「いやいや、これは作業用の流し。クッキング用は別にあるさ」とキッチンに戻ります。それは庭に面した調理台にありました。その調理台の中央に来た時、庭に面した窓から見た光景は居間から見た景色を更に上回る見事なものでした。最大の理由は窓が、立った目の位置を中心に、横長に切られているからです。居間のソファからではフランス窓の下部から庭への階段部分が目に入り庭だけを切り出せないからです。窓からの美しい眺めに、「ジェフ、Avril はここからの庭を気に入っていたらうね？」と問いたくなりましたが、「そうだったんだ」と言う答えが恐く、黙って次の部屋に移りました。そこは玄関ホールの階段下から入る部屋で窓は広場側にあります。全体に部屋の雰囲気は重々しく、絵画や壁掛けも居間に比べ凝った物が壁面を飾っています。「この部屋は特別な部屋で、少しフォーマルな来客があったときのダイニングなんだよ」暖炉があり、四人用テーブル・椅子も重厚なつくりです。二階は三つの寝室と共用のバスルームです。このバスルームは階段を上った所にあり、窓は庭に面しています。ドアの配置から少なくとも二つの寝室からは庭を見下ろせるはずですが。手作りのイングリッシュガーデン、200 年を経た建物こそ、二人だけの生活に戻ったジェフ夫妻の理想郷だったのです。

5) Village ツアー

「娘婿が孫を保育園から引き取り、4 時半頃ここに来る」出来るだけファミリーを私に紹介しようという彼の気配りです。「未だ時間があるから Village を案内しよう」

先に屋外に出て彼を待つ間、もう一度仔細に広場を点検しました。“クラシックカー”は何処だ？彼の家の左外部に、自動車一台分は充分ある横長の木製の柵があり、その奥にかなり大きな物置のようなものがあります。庭へ出た時それを見てひょっとして？と考え続けていました。外へ出てきた彼に、「ジェフ、あの左部分の土地も君のものかい？」「いや、奥の家のものさ」「……（クラシックカーはどうなったんだ！？）」

路地を出ると村の中心ある忠魂碑のランナバウトへ向かいます。両側は概ね小さな商店、インド料理が数件、タイ料理も数件、ベトナム料理もあるそうです。もちろんパブも何件か。八百屋、肉屋、忠魂碑は第一次、第二次世界大戦に参戦し戦死したこの村出身者の名前が刻んであるそうです。「これはどんな所にも必ず在るんだ。日本はどうだ？」「Shrine（神社）に在るんだが、何処の神社にもあるわけではないんだ」「Shinto（神道）か？」「良

く知っているなー」「Hiro は神道か?」「いや、仏教徒だ」こんな話をしているうちに商店街が切れて、住宅街に来ました。いわゆるタウンハウス、それも二戸一棟のモダンで高級感のあるものです。「あれはいつ頃出来たものかな?」「ウン?あれは 60 年代だな (いかにも関心が無いと言うトーンで)」

一巡して忠魂碑に戻り、今度は反対側を探訪。細い石畳を行くと先の方に教会が見えてきました。「Priory (修道院と一体になった教会) って知っているか?」「左側のタウンハウスは、昔はこの教会で働く人達の家だったんだ」「この教会はとても古いものだ。実は、我が家はこの教会教区の人達の馬具鍛冶の家だったんだ」「(馬具鍛冶か! それで隣の家に妙なグリーンの大きな扉があったんだ)」「この辺の人は殆どこの教会の信徒さ。でも俺は来ないんだ。これは英国国教会だが、俺はカソリックなんだ。」(I 'm from UK ! 発言の理由が仄かに見えた瞬間です)。外へ出て別の道に戻ると途中に小川が流れています。「これが此処の地名の基、Trym 川だよ」川に沿った道にトヨタ MR-S が止まっています。「これは僕の車と同じだ!」(一くさり講釈すると)「俺は 1970 年のモーガンを持っていたんだ。モーガン 4 だ。しかし数年前に手放した」(エッ!あれはモーガンだったのか!そうか、手放したのか!残念だがこれで“クラシックカー”は一件落着)。

Cottage に戻ると直ぐ外で子供の声がし、可愛い女の子が駆け込んできました。最初の孫、Amy です。帰宅途中私のために寄り道してくれたのです。お土産を用意してあったので、手渡すと皆大喜びをしてくれました。娘婿は鉄道の保線技師だそうです。好感の持てる若者でした。早々に戻る彼らを見送りに外に出ると、車のチャイルドシートの中で男の子が寝息をたてながら眠っていました。見送るジェフの顔は本当に幸福そうでした。

広場から戻ると、「今日は息子がディナーを用意してくれるんだが、仕事を終えて此処に来るまでにはまだ時間がある。パブへ行こう!」

6) パブ初体験

“イギリスに行ったらパブに行かなきゃ”、訪英経験のある誰もが言うアドバイスです。ランカスターにも沢山パブがありますが、どうしても一人で行く気になれず、酒好きの Maurice も誘ってくれません。やっとその機会がきました。当然彼のパブ「White Lion」です。店は予想したより明るく、バーテンは皆黒い半そでシャツを着た若い女性、お客も結構女性がいます。「何にする?」「ビター (黒ビール) だな」「銘柄はなんだ?」「ウーンいつもはジョン・スミスだがジェフと同じにしてくれ」確かボンバルディアと言う銘柄のビターが 1 パイントグラスになみなみと満たされます。それをカウンターで受け取りテーブル席に移ります。アテは全くなし。これで何時間でも仲間同士語り合ふのです。最近は大形のスクリーンなどを装備し、皆でフットボールやラグビーの試合に興ずる所も多いようです。

いろいろな話題 (特に、裁判員としての興味深い話が中心) を肴に飲んでいっているうちに、酒の話になりました。「この間スーパーで買い物をしていたら“アイリッシュ・サイダー”と言うのを箱詰めめで安売りしていた。アルコール類であることは分かるが一体どんな飲み

物なんだ？やはりビターの類かい？一度味わってみたいが一缶売りがないので逡巡しているんだ」「あれはビターではない！ワインみたいな飲み物だ。飲む機会を作ってやるよ」

翌日バス、ブリストル市内の観光を終わり、一旦ホテルで休んだ後レストランで食事をすることになっていました。彼が迎えに来てくれて、「ディナーまでには少し時間がある。パブで一杯やってから行こう」とホテルの裏手の方に歩き始めました。商店も無い通りの奥にポツと一軒のパブがありました。「Coronation Tap」と言う店です。ドアを開けて中に入ると薄暗く、カウンターもテーブルも黒光りしている荒削りな木製。“想像していたパブ”の雰囲気です。カウンターに行きジェフが「アイリッシュ・サイダーを飲んだことの無いやつを連れてきた」とカウンターの中のオヤジに私を紹介します。「Hiro 今いくつだ？」「68歳?!オイ 68までアイリッシュ・サイダー飲んだことの無いやつに適當なのは何かな？」カウンターの後ろには蛇口のついた樽がいくつもあります。全部銘柄の違うアイリッシュ・サイダーなのです。ここはアイリッシュ・サイダーが売り物のパブです（無論他の酒も飲めますが）。「そうか！初めてか！じゃあ、“Exhibition”が良いだろう」私はExhibition、ジェフはビター、息子はラガーそれぞれ1パイントのグラスを持って、テーブル席へ。二人は私が飲むのを見つめています。一口飲むと、ジェフが「どうだ？」と、確かにワインのような味です。酸味と甘みが微妙にバランスし、シャンペンのように弾ける感覚がアルコールにそれほど強くない私の口にぴったり。「良い味で飲み易い！」すかさず息子が壁を指差しながら「気をつけてください！アルコール度はビールより高いですからね」壁に掛かった黒板に各銘柄のアルコール度が書いてあります。最高は7.4%もある！こちらへ来てから愛飲しているジョン・スミス・エキストラ・スムーズは4%。同じ1パイントだが店を出る時には確り違いを認識できる状態になっていました。

アイリッシュ・サイダーはリンゴ酒で、食用とは別種の酸味の強いリンゴから作ります。発泡性のものとストレートの2種があり、私の飲んだものは発泡性の方です。アルコール度が高い割には口当たりがよいのでつい飲みすぎてしまい、気がついたら足腰が定まらない状態になるのです。ワインと違い小さくてもハーフパイント（通常は1パイント）のグラスで飲むので飲み慣れない人はがぶ飲みしてしまうことも要注意だそうです。

7) 英国家庭料理を味わう

「White Lion」で飲んでしていると携帯電話が鳴りました。「息子が帰ってきた。家へ戻ろう」道路を渡り路地を通して小さな専用広場を横切るともうそこは“Vine Cottage”、飲み屋（ビター）から飲み屋（ワイン）への移動です。

息子のGareth（ギャロ）は29歳、今年ブリストル大ビジネス専攻修士修了。これから本格的な職探し（英国の大卒者の就職状況についてはもう少し情報を集めてご報告したいと考えています。一言で言えば、大多数が学部卒業即失業者の状態です）に入ります。今まで親と離れアスレティッククラブで働きながら、大学院仲間とフラット暮らしをしていましたが、来週は自宅に帰ってきて、ジェフと暮らすことになっています。

ジェフに訪問を問い合わせた時、二晩の夕食の希望を聞いてきました。「英国の伝統的な

料理を食べたい」と返事をしました。その結果、今夜は自宅でギャロの手料理、明日は英国料理のレストランを準備してくれました。ギャロは学部卒後の半失業者時代、アルバイトをしながら世界各地を廻り、その間料理に関心を持ち、腕を磨いたとのこと。姉が二人、歳が離れて生まれた男の子、甘い感じを予測していましたが、確りした好男子です。挨拶を済ますと直ぐキッチンに戻り、私たちは広場側の居間で待ちます。暖炉にはチロチロとコークスが燃えています（イミテーションですが良く出来ています。実際はガスです。私のために7月だというのにデモをしてくれたのです）。煙突は機能しているそうです。用意ができたようなので、例の賓客用ダイニングルームに移ります。ここでも暖炉が燃えています。やがて運ばれてきた料理は“マッシュポテトの上にソーセージが乗り、独特の甘みをもったソースがかかったもの”です。ギャロの秘術はこのソースです。一口食べて“これはいける！”赤ワインと良く合います。

訪英が決まった時、先にご紹介した東燃同期の F 君が、デーリーテレグラフの東京駐在員が書いた、日英文化比較を草の根レベル行った本を贈ってくれました。その中に英国料理に触れた項があります。そこには、「英国料理は不味い不味いと言われるが、それはホテルや高級レストランで食べる料理に与えられる評価で、家庭料理は全く別物、美味しくないはずはない」と書いています。ギャロの料理を食べて、その記述に100%同意しました。

8) I'm from UK

チョコレートケーキのデザートも終わり、ジェフも私もメートルが上がってきました。いよいよ今回訪問の主目的を質す時が来ました。「ギャロ、ジェフと僕が初めて会った時の話をしようか?」「是非!」「ジェフ!覚えているかい?僕が“You are from England, aren't you?”と聞いた時、しばらく黙っていて“I'm from UK”と答えたのを」「ウーン?覚えていないな」「日本語では英国 (Britain あるいは UK) のことを IGIRISU と言うんだ。これは English から来ている。そして多くの日本人は (24 年前の僕も含め) England が英国と同義だと思っているんだ。君のあの一言で英国に対する認識を一新し、UK を構成する国々を、新たな視点から見るとなったんだ。あの時意識して UK と答えたとはばかり思っていたんだが」「……」。酔った勢いもありここから一気に詰めに入りました。「ジェフ、君は何処で生まれ、何処で育ったんだ?」「ミッドランドだ。ブリストルのやや北東、バーミンガムやコベントリーの在る一帯をそう呼ぶ」「じゃあ典型的なイングランド人なんだね?」「いや!先祖はアイリッシュさ。そして Avril はウェリッシュ。玄関の入口に在った石の置物に赤い竜が描いてあったろう?あれはウェールズの紋章さ!」

私の不勉強から発した“from England?”に対して、あの時ジェフの心に去来したに違いない、怒りの根源を解明しました。この旅の目的が達せられた瞬間です。

24 年前のバークレー管理職向け MBA プログラムの副題は“アメリカ経済を如何に再生 (Revitalize) するか?”でした。“Japan as No. 1”の時代で、授業には頻繁に日本がでて来ます。そして、論じられたのは“日本は特殊か否か?”でした。ジェフはこの時のことを良く覚えていて、今夜は“英国特殊論”を展開し始めました。「アメリカもドイツも日本

も同じさ！**British** だけは違うんだ！」「どこが？」「アメリカは何かあれば国歌、国旗だ！一つに纏まろう、纏めようとする！ドイツはもっと国家意識が強い！日本はもともと単一だ！我われはそれぞれが独立し、一人で考え、独りで決める！これが **British** なんだ！軍関係以外、学校で国旗掲揚や国歌を歌ったりしないんだ！」酔いが廻ってきた彼の論理に疑問を感じながら、「**UK** と一まとめにされて堪るか！」と言う、複雑な歴史を背負うこの国唯一の友人の本音を見た思いがしました。訪ねて来て良かった。確実に、彼と英国理解に一步踏み込めた。

9) ヴィクトリア朝タウンハウス

翌日 18 日は朝から良い天気。9 時半にジェフが迎えに来てくれました。今日は一日ブリistolとその近郊を案内してくれることになっています。しかし、観光はアペタイザーでした。

ホテルの近くは英国では珍しく、**gorge** と呼ばれる深い谷が切り込んでいます。その谷にはブルネルと言う技術者が 200 年前に建設した、見事なつり橋がエイボン川を跨いで架かっています。今でも十分実用に耐え車が往来しています。我われの車はその橋の遥か下方、エイボン川に沿った道路を南東に向け、**Bath** を目指します。**Bath** はバス（風呂）の語源となった土地で、温泉（**Spa**）があります。ローマがこの島に到来した時に建設した浴場があり、近年までこれも周辺を整備した上で実用に供されていました（現在は衛生上の問題で見学するだけです）。英国有数の観光地で、日本の英国観光案内書にも詳しく紹介されていますからここでは省略します。

バース市内の名所を観て歩いた後、紅茶とスコーンで軽い昼食（？）を摂っているとき、「これからブリistol市内に戻り、車をホテルに置いて何ヶ所か観光スポット案内する。その後ジーニーの家を訪問する。ジーニーは **Avril** の幼馴染なんだ。家族みたいな者だから遠慮はいらない」「…（何でそんな人を訪れるのだろうか？）」

市内では先ずエイボン川がブリistol港を成す場所に行き、1497 年ここから出てカナダのニューファウンドランドを発見した帆船のレプリカなどを見学、そこからホテルに戻り、ここに車を置いて最初に向かったのが、**gorge** を成す崖縁に建てられたホテルです。この広いテラスは市内とつり橋が見渡せる絶景の地です。晴天のテラスでビターを飲んでいると、「新年に送った手紙に添えた写真が有っただろう？昨秋のコンコルドのラストフライトとあのつり橋が写った」「ああ あの写真、覚えているよ」、それは **Avril** の死を伝える手紙に添えられたもので、生まれたばかりの **Avril** 二世の写真と一緒に送られてきたものです。手紙には「コンコルドを見上げる群衆の中に、**Avril** と自分も居るんだ」と記されていました。「われわれが居たのはこのテラスさ」季節こそ違え、陽光の中でワインを手にした **Avril**（彼女はワイン派：だから **Vine Cottage**）とビターを持ったジェフ、一瞬にして飛び去っていったコンコルドのラストフライトを興奮気味に語り合う仲の良い初老のカップルが目に見えます。自らの間近に迫ったラストフライトも知らぬ気に。

次に向かったのはブリistolのランドマーク、カボット（**John Cabot**；ニューファン

ランドの発見者) タワーです。高台のホテルから一気に行けると思ったら大間違い！途中何度もアップダウンがあり、エイボン川に向けて市内が一望できる公園内に建つタワー下に着いたときは二人とも更に展望台に上がる元気はありませんでした。しかし、お陰でアルコール分を発散し、ジーニー宅訪問には好都合です。初対面で酒臭いのはまずいですからね。公園内の道をタワーから下りながら「ジーニーの家はこの道を下った所にあるんだが、最近来ていないから直ぐに探せるかな?」と頼りない。公園を出た一筋目の道でそれと思しき所で一軒一軒チェックを始める。間もなく「あっ！ここだ！どんびしゃだ！」それは正面を公園の側に向けて建てられた品の良いヴィクトリア様式のタウンハウスです（ヴィクトリア様式とジョージア様式の違いは、後者は2階部分にテラスがありしばしばテラスハウスと呼ばれます。また、前者は出窓部分があるなど凸凹した構造に対して、後者は平べったい造りになっています）。ランカスターの街なかで目にするタウンハウスとは出来が違うこと一目です。周囲の環境も公園があるので緑が多く、区画全体が宮殿の一角のような雰囲気です。傾斜地に建てられた10戸ばかりが一棟を成すタウンハウスの一番高い側がジーニーの家です。

前庭部分はかなりありますが、残念ながら“庭”の部分は僅かです。それは傾斜地に建てられていることや、この家独特の構造からきています。左部分は玄関に向けて門から階段を上っていくためそのスペースが必要です。右側部分は半地下の部屋に向けて傾斜しそこは駐車スペースに使われています。

階段を上ってジェフが呼び鈴を押すと間もなく、小柄で銀髪のいかにも上品な感じの女性が現れ、ジェフと頬を寄せ合い挨拶を交わしています。ジーニーです。

「これがHiroだ。パークレーと一緒にね（全く関係は有りませんが、直ぐそばにパークレーと言う名の通りがあった）。英国人の家を見せてやろうと思って連れて来たんだ。いいね?」「ようこそ！もちろんよ」「突然お邪魔してすみません」「良いんですよ。さあ、中へどうぞ」、「主人を20年前に亡くし、色々あったんですよ。でも今は娘も独立、他の女性がパートナーとして一緒に住んでいるの」と言うような按配で第二の英国家庭訪問です。

玄関を入るとホールのような、廊下のような部分が奥へ続いています。奥にはシッティングルームがあってその部屋はバックヤードへの通路を兼ねています。この奥のシッティングルームは同居している女性が主に使うようです。玄関を入れて右側にダイニングキッチンがあります。薄茶色の木目調の家具・調理システムで纏められた部屋は明るく丁度公園が借景となって緑が窓いっぱい広がっています。「普通ここはシッティングルームとして使う人が多いんだけど我が家はダイニングにしたの。シッティングルームは上の階。どうぞ自由にご覧になって」玄関ホールの中央部に入口と直角の位置で階段があります。階段を途中のステージまで行くと玄関と反対側（バックヤード側）に部屋がありそこにはデスクの上にPCなどがありどうやらジーニーの仕事室と言う感じです（彼女の仕事はマーケティング関係）。そのステージで折れて更に上がると公園側に玄関ホールとダイニングキッチンを合わせた広さのシッティングルームがあります。ソファは白、家具は薄茶色、大

きな暖炉があります。窓一面に公園の緑。エレベーションが高くなった分道路と絶縁され、眺望が開けます。シッティイングルームの裏庭側は扉が閉じられています。多分ジーニーの寝室でしょう。次いで裏庭に廻ります。玄関から裏のシッティイングルームを通ると裏庭に向けてドアがあります。ここから裏庭には玄関同様階段で下りていきます。

裏庭に出てわかったことは、この家には半地下式の部屋が更に二つあり、一部屋はどうやら同居の女性の寝室、もう一つはユーティリティのようです。

庭は芝生ではなく、中央部に正方形の石を配し、周辺に草花や小振りの樹木が植えられています。三方は石壁で囲われ、プライバシーが適度に保たれています。鳥が来て餌を啄ばむ台なども有り、都会の中とは思えない空間が出来ています。石を敷き詰めた部分には木製の丸テーブルと同じ材料で出来た椅子が四脚置いてあります。日はまだ高く、庭の三分の一位はまぶしい陽光が、家に近い残りの部分は日陰になり光のコントラストが強烈です。こんな光の具合は英国に来て初めてと言って良いでしょう。落ち着きと華やかさの中で美味しいレモンケーキと紅茶をいただきました。

去る時間聞いてみました。「このお宅は何時ごろ出来たものですか？」すかさず「1880年よ。そんなに古くないの」 恐れ入りました！

最後に駐車場を眺めると、黒いソフトトップと車体は銀色の小型車が置いてありました。ジーニーの車です。サングラスを掛けた彼女が幌をオープンにし、銀髪をなびかせながら田園を走る姿が頭の中を過ぎりました。

この日はこの後ホテルで休養し、先にご紹介したアイリッシュ・サイダーを飲みパブへ。そして最後は繁華街からは離れた場所にある、こじんまりした英国料理のレストラン（「チョットフォーマルだからな」「タイは要るのかい?」「タイは要らないが、シャツとジャケットは着用してくれ」と言う程度の）でフルコース（と言っても、前菜・メイン・デザート）ディナーをご馳走になりました。私が選んだメインは“ロースト・ラム”。「誰だ！英国料理は不味くて食えないなんて言ってる奴は！」

良き友、良き人、良き家、良き酒、良き料理で過ごしたブリストルでした。

以上